
コスモスのように・・・

玉篠

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

コスモスのように・・・

【Nコード】

N5953Y

【作者名】

玉篠

【あらすじ】

とある国の伯爵令嬢・ブランカは、自他共に認める変わり者。人付き合いが苦手で、ひたすら孤独を愛する彼女が選んだのは、間もなく即位するであろう新皇帝の後宮入り。

日陰者として、後宮の片隅で好きなことをやりながら生きていけると思ったのだけど・・・

ひよんな事から、新皇帝こと現皇太子の目に留まってしまった・・・

プロローグ

薄暗かった手元が、パツと明るくなった。

その明るさに、ブランカは刺繍をしていた手を止めると、おもむろに頭を上げ、明りを点してくれた世話役の女中に向かって

「アンナ、もうこんな時刻だったの？」

と、尋ねた。

明りを点し終えた女中のアンナは、にっこりと笑うと

「お嬢様は夢中になって刺繍をなさっておいででございましたから・・・」

ブランカは、照れくさそうに微笑むと、テーブルの上に置いてある見知らぬ箱に気づく

「アンナ、あの箱は？」

「お嬢様が後宮入りするときに、お召しになられるドレスが、先ほど届いたのでございますわ。
ご覧になりますか？」

ブランカは、そつと首を横に振ると、

「もう暗くなってきたから、明日にするわ。

そっか・・・私、もうすぐ皇太子殿下の後宮に入るのよ・・・ね」

どこかさばさばとした口調で言うと、再び刺繍を始めた。

第一話 変わり者の伯爵令嬢

ブランカはこの国・・・ロルカ帝国の海岸地方を治める貴族 ウエスカ伯爵の長女だ。

八人兄弟の一番上で、下に、三人の弟と四人の妹がいる。

兄弟が多いこともあって、両親はブランカの事をあまりかまわなかった。

愛されなかったわけではない。

欲しいものは大抵与えられたし、望めば大抵の事は（時間はなかったが）かなえられた

家庭教師から、貴婦人として必要なきちんとした教育も受けることが出来た。

絵が趣味だった父は、ブランカに絵の描き方や色に寄って違う絵の具の特徴を。

母は、刺繍の技法を教わってはいた。

が・・・

何故か、ブランカの心は覚めていた。

弟たちや妹達のように、両親に甘える事もあまりなく・・・
どたらかと言えば、ブランカを育ててくれたのは、一緒に住んでいた母方の祖母・カルビア伯爵夫人だったかも知れない。

祖母は、ブランカに、色々なことを教えてくれた。

ドレスの縫い方

編み物やレース編みのやり方
公式行事の時の調度品の選び方から、テーブルウェアの選び方
旅行に行く時の、トランクの詰め方まで。

妹達が知らないことまで、一通り教えてくれた。

そのこともあって、ブランカは、貴婦人としてのたしなみは備えていたのだが・・・

年を経るに従って、大勢の人と交わることを拒むようになっていったのだ。

幼い頃に暮らした屋敷の近くに、ブランカの遊び相手となるような年頃の貴族令嬢がいなかった事も原因のひとつだろうが

いつも屋敷の中で、召使をも遠ざけて。

一人、刺繍をしたり、歴史物語を読んだり、気が向けばハープを奏でたりして日々をすごした。

たまに出かけることもある。

が、両氏の許可をもらってはいるものの、供一人連れず・・・
まるで召使か下働きのような姿で辻馬車を乗り継ぎ、帝国内の旧跡や古い神殿に詣でるのだ。

女の一人旅が安全でないことはわかりきってはいるのだが、ロルカ帝国の国内は割りと治安がよくて。

ここ数年、豊作も続いていることもあり、今までこれといった危険にさらされたことはなかった。

マントから顔をひょこんと出し、
「どこそこの神殿への巡礼に行くのですが・・・」
といえば、民も笑顔で話しかけてきたり、ブランカの質問に応じたりしてくれる。

そんな一回限りの会話が、ブランカは好きだった。

自他共に認める

変わり者の伯爵令嬢・ブランカ

両親は、苦々しく思っているようだが・・・
ブランカ自身は全く気にしてはいなかった。

第二話 それは、突然に

自他共に認める 変わり者の伯爵令嬢 ブランカ・デ・ウエスカ

孤独を愛するがゆえに、舞踏会だの夜会だのにはあまり出席しなかったが、どこでブランカの姿を見かけたのか

それとも、そこそこ財力があるウエスカ伯爵の援助目的か

理由は定かではなかったが、年頃になったブランカに求婚してくる貴公子は、そこそこいた。

特に、表面上はにこやかな笑顔で舞踏会に出席した翌日などは、ブランカ宛の花や菓子、装身具などの多くのプレゼントが、手紙とともに伯爵家に届けられるくらいだった。

しかし・・・

ブランカは、それらの手紙に型どおりの返事をするだけにとどめていた。

勿論、ブランカ自身もわかっているのだ。

自分が早く嫁がねば、四人の妹達の縁組に支障が出る事くらいは。でも、かなりの恋愛小説を読みこなしていたブランカにとって、恋愛とか結婚

などと言うものに、いまひとつ興味がわかず、求婚してくる貴公子たちを

異性

としてみることは出来なかった。

ブランカが20歳になり、そろそろ両親もブランカの結婚の事を本気で悩むようになってきていた、ある年の初め。

前年の夏に第一后妃を失って以来、病の床に臥されていた皇帝陛下が崩御なされた。

第一后妃の後を追うような、皇帝陛下の崩御。

皇族は、一年の間

それ以外の貴族や平民は、二ヶ月の間、それぞれ喪に服すよう、お触れが出、

崩御から一ヶ月後に、盛大な葬儀が行われる。

政務を滞らせるわけにはいかなかったから、崩御の三日後に皇太子は、践祚＞＞せんそく（皇帝が崩御なされた後、皇太子が即位までの間、皇太子の身分のまま政務を執ること）なされ、皇太子の身分のまま政務を執られるようになられる。

皇太子が正式に皇帝として即位する戴冠式は、前皇帝の喪が明ける一年後の春と定められ、

同時に、新皇帝・・・つまり、現皇太子の後宮づくりが始められた。皇帝の戴冠式と第一后妃の戴冠式を別々に行うことは、財政面から見ても無駄が多い。

それならば、同時に行ってしまえ・・・と、言うわけである。

新皇帝の後宮づくり

後宮をはじめとした宮廷内部の事を司る宮内庁は、早速、新皇帝の正室と側室にふさわしい女性を集めるため、13歳～24歳までの娘がいる貴族の元に、娘の後宮入りを進める手紙を発送した。

その中に、勿論、ブランカの後宮入りを進めるウエスカ伯爵宛の手

紙もあった。

ブランカの事は宮廷内でも評判になっていたから、知らないはずはないのだが……

一人の役人が

「もしや新皇帝は、変わり者の娘をご所望かも知れませんぞ」と、言ったことから、ブランカにも後宮入りのチャンスが与えられることとなったのである。

朝食の席で、前触れもなく両親からその話を聞いた時。

ブランカは少し驚いたが、

「お父様、そのお話、進めて下さいませんか？」
と、返事をしたのだ。

食後のコーヒーを飲んでいたウエスカ伯爵・パブロは、カップをソーサーの上に戻すと

「本当にいいのか？ ブランカ」
と、問い返す。

ブランカは、パンに手を伸ばしながら

「私はいずれ嫁がねばならないのでしょうか？
でしたら、後宮だろうがどこかの侯爵様だろうが同じではありませんか」

と、笑いながら言う。

伯爵は満足そうに頷くと、隣に座ってフルーツを食べていた伯爵夫人・ナターリアに向かって

「ブランカが承知したのならば、ナターリアもいいね」
と、念を押すように言った。

「わあ……お姉さま、后妃様になるんだ」
「ねえ、后妃様になったら、私も宮廷に招いてよね、ね」

ブランカの妹達が、口々にはやし立てる。

「これこれ、まだ本当に決まったわけではありませんよ。

後宮入りするためには、これからいくつかの試験があるのですから

」

ナターリアがたしなめたが、妹達の騒ぎはなかなか収まらない。

そんな中、ブランカは全く別の事を考えていた。

『これで・・・ようやく一人で好きなことが出来るわ・・・』

と。

第三話 後宮入内試験

ウエスカ伯爵令嬢・ブランカは後宮へ入内（じゅだい。後宮へ入ること）する意思がある
と、言うことが宮内庁へ返事を出してから10日ほど経った、初夏
と言うにはまだ早いある日の朝。

宮内庁管轄の迎賓館の一室に、ブランカの姿があった。

いや、ブランカだけではなかった。

貴族の令嬢と思われる、数人の娘達も一緒だ。

ここで、これから後宮への入内に関する試験が行われる事になっていた。

いや、正式にはこの試験は二次試験・・・本試験とも言われるものだ。

一次試験とも言うべき予備試験は、入内の意思があると宮内庁へ出してから間もなく行われていた。

予備試験は、いわゆる書類選考と身辺調査である。

領地に重税を課してはいないか

三親等以内の身内に、大臣や司法長官など、特定の権力に直接結び
ついている者はいないか

財力はどうか

などが、事細かく調べられ、ふるいにかけて。

残った令嬢が、今、ここに集められ、本試験に望むのだ。

本試験の内容は、礼儀作法や歴史、地理、外国語などの筆記試験と、ピアノやフルート、ハープなど好きな楽器の演奏それに歌唱である。

勿論、楽器の演奏の時は、試験会場に入ってから出て行くまでの立ち居振る舞いも試験の対象となっていた。

ブランカは、筆記試験の方は無難にこなしていた。

外国語はさっぱりだったが・・・

歴史や地理の問題ともなると、すらすらとペンを走らせた。

そして楽器の演奏なのだが・・・

ここでちょっとしたハプニングが起こった。

マンドリンを奏でる予定だった、ブランカの前の番の令嬢が、うっかりマンドリンを奏でるために必要な鼈甲のピックを忘れてしまっていたのである。

運悪く、試験会場にはお付きの侍女はつれてくることが出来ない。

「くすん・・・くすん・・・あれがないと、マンドリンが演奏できないわ」

令嬢は、控え室で泣いた。

「お父様もお母様も、我が家の名誉だからって、入内を喜んでくださっているのに・・・

私が試験に失敗したら・・・

どれほどお怒りになられるか・・・」

くすんくすんと泣く令嬢を見てはいるのだが、他の令嬢は彼女を蔑みの目で見ても、助けを出すものはいなかった。

ここにいる自分以外の者、全てが、競争相手なのだから。

泣きじゃくる令嬢に、ブランカはそっと近寄った。

ブランカは一応、マンドリンの心得はある。

だから、万が一のときに備えて、ピックを持って来ていたのだ。

そのピックをそっと令嬢に差し出すと

「これでよかったら、どうぞお使い下さい」と、手渡した。

令嬢は、驚いたようにブランカの顔を見ていたが、すぐに顔を明るくすると、そっとピックを受け取り

何度も頭を下げながら、ドアの向こうに消えていった。

数日後。

ウエスカ伯爵家に

ウエスカ伯爵長女 ブランカ・デ・ウエスカ を、新皇帝陛下の配
偶者候補と定め、正式に後宮へお迎えする

との、宮内庁からの命令書を携えた使者がやってきた。

第四話 入内の日

宮内庁からブランカの入内許可が正式に下りた日から、ウエスカ伯爵家は、ブランカの入内に向けてにわかに慌しくなった。

ブランカの嫁入り支度は、ブランカが年頃になった15歳頃から、少しずつ進められていたのだが・・・

嫁入り先が新皇帝の後宮である。

伯爵家の対面上、恥ずかしくない支度を調えなくてはならない。

それも、ブランカをはじめとした後宮入りの許可が下りた娘達の入内の日は、どういう理由からか、

夏の終わりの某日

と、宮内庁から通達があったため、支度を調える期間は約3ヶ月しかなかった。

入内許可が下りた日に、宮内庁から渡された心得書と支度についての覚書のようなものには、

実家から後宮へ連れて行く事が出来るお付きの侍女は一名に限ると、記載されていたので、それも選ばねばならない。

もともと侍女については、ブランカの乳姉妹であるアンナが、自ら名乗りを上げてくれたため、困ることはなかったのだが。

食器をはじめとした銀器

陶磁器のティーセット

お化粧道具

礼服や普段着などのドレス類

それに靴

仕立て屋や商人達が、毎日のように屋敷に出入りし、伯爵や伯爵夫人がこまごまとした指示を出していく中、ブランカだけはいつものうりの様子で。

侍女のアンナをも遠ざけては、刺繍やレース編みなどを行って日々を過ごしていた。

一つだけ違うようになったのは、ブランカが読む本が、宮内庁から渡された

後宮での礼儀作法の指南書

と

後宮での心得書

が、多くなったことだろうか。

『 どうせうちの身分は伯爵だし・・・入内試験の時に見かけた他の令嬢みたいに皇太子殿下の第一后妃になれば・・・なんて事もない。

あー、楽よねー 』

日々調えられていく支度を見ながら、ブランカだけは他人事のようにそんなことを考えていた。

やがて、時は過ぎ。

ブランカの入内の日となった。

整えられたブランカの嫁入り支度は、宮内庁の役人の確認の後、3日前に既に後宮へと送りだされていたので、この日、ブランカは身一つで後宮へ向かうこととなった。

その日。

ブランカは朝早くに起こされ、普段は母についている侍女達の手によって、香油を少したらしたお湯で体を拭かれ、ドレスを身につけさせられた。

普段はあまりしない化粧も、今日ばかりはきっちりと施されていく。髪も何度も梳かれ、ブランカが好きな香りの香油を使って結い上げられた。

所定の時刻

ドレスの上に、旅行用のマントを羽織り、すっかり支度も整って伯爵邸の玄関に姿を現したブランカ。

「お姉さま、綺麗!!」

「お姉さま、お幸せにね」

「ブランカ・・・つらくなったら、いつでも帰って来ていいんだよ」

妹達や祖母のカルピア伯爵夫人と別れの言葉を交わし、両親からは軽い戒めと祝福の言葉をかけられ・・・

ブランカは、王宮から差し向けられた馬車の人となった。

向かいの席には、後宮でブランカの身の回りの世話をするアンナと宮内庁からブランカを迎えに来た、女官のフェロル侯爵夫人が、緊

張した表情で座っている。

第一后妃としての入内ならば、両親の同行が許されるのだが・・・
ブランカの入内は、あくまで
新皇帝の第一后妃候補

と、しての入内であるため、両親の同行は宮内庁から許されなかった。

「さようなら・・・は言いません。
行って参ります」

ブランカがそういうと、馬車のドアが閉められ
王宮に向かって、馬車は走り出した。

第五話 後宮・・・(前書き)

ブランカ視点でのお話です

第五話 後宮・・・

入内の支度を整えた私は、両親や兄弟姉妹、祖母と別れの挨拶を行うと、王宮から差し向けられた馬車に乗った。

王宮・・・というか、宮内庁から私を迎えに来た女官のフェロル侯爵夫人と、後宮で私の世話をしてくれる侍女のアンナも一緒だ。

あらかじめ渡されていた入内の順序によると、馬車はまっすぐ王宮に向かわず、まず、都の郊外にある離宮

『メニーナ宮殿』

に行き、そこで小休憩をとるらしい。

なんでも、数代前の皇帝の皇后・・・第一后妃で、『国母』

と、今も称えられる マルガレータ皇后が妾妃しょうひだった頃、この離宮で暮らしていたことから、皇帝の後宮に入内する娘達は必ずこの離宮に立ち寄って、小休憩をすることが慣例となったそう。

でも・・・

今日は、私以外にも数人の貴族令嬢が、皇太子殿下もとい新皇帝陛下の後宮に入内することになっている。

離宮とはいえ、入内する令嬢同士が同じ部屋でぼったり出会う・・・なんてことにならないといいけど

なんて思っていたら、フェロル侯爵夫人が、その疑問に答えてくれた。

離宮に到着する時間と、王宮に到着する時間は、入内する令嬢によって少しずつずらしてあるため、入内する令嬢同士が離宮で出会うことはないんだそう。

あ、納得。

メニーナ宮殿で、紅茶とお菓子の供応を受けたら、いよいよ王宮へと向かうこととなる。

フェロル侯爵夫人が、私が退屈しないように話しかけてくれるが、私ははっきり言ってそれどころではなかった。

だって、この馬車、やたら上下に揺れるんだもん。

いえ、揺れる原因は馬車じゃなくて。

本当は石畳の道にあるんだけどさ、がたがた上下にゆれる馬車に乗っていると、馬車に慣れている私ですら乗り物酔いしそうになってしまう。

アンナやフェロル侯爵夫人は、よく乗り物酔いしないなあ・・・

なんて思いながら、ちらりと侯爵夫人の顔を見たら、侯爵夫人も少し青ざめていて。

「次に令嬢のお出迎えの任を賜ったら、メニーナ宮殿から王宮までは別の道を通ってもらいましょう」
と、小声で言っていた。

やがて、馬車は王宮に到着した。

見慣れない門から、私を乗せた馬車は、王宮の敷地内に入る。

なんでもあの門は 『月の門』 と言って、入内する令嬢専用の門だそうだ。

大きな建物の前で、アンナの介添えの下、馬車を降りる。

と、そこには、きっちりとした礼装の初老の男性と、黒の宮廷ドレ

スをまとった貴婦人が、数人の侍女とともに立っていた。

私はマンティラを脱いでアンナに渡すと、それを合図にフェロル侯爵夫人が二人の前にすすんで頭を下げ

「ウエスカ伯爵令嬢 ブランカ様を、お連れいたしました」

と、挨拶をした。

私も軽く頭を下げ、ドレスの裾を軽く広げた姿で挨拶する。

「ウエスカ伯爵 パブロ・ホセ・デ・ウエスカ が長女 ブランカでございます。

このたびは皇太子殿下のお傍にお仕えいたす名誉を賜り、光栄でございます」

「ようこそ、ウエスカ伯爵令嬢。

私は皇太子殿下付きの女官長を務めております、イサベル・マリア・デ・クエンカと申します。

こちらは、皇太子殿下の侍従長であるアランフェス子爵。

ウエスカ伯爵令嬢の入内を、心からお喜びいたします」

女官長の型どおりの挨拶を聞き終わると、私は女官長の先導の元、これから暮らす住まいへと案内された。

そこは、

後宮

と、言っても、女官長や上級女官といった高位の女性達が暮らす建物だった。

「こんな所で暮らさねばならないの？」

と、アンナは文句を言っていたが・・・

新皇帝の後妃や妾妃のための後宮の建物は、現在、改築中だとかで、戴冠式までには整うから、それまでの間、入内した全ての令嬢達は、この後宮女官用の建物で生活することになっているのだそうだ。

その建物は、南北に貫く建物が一つあり、その建物を中心として、そこから東西に4つずつ翼のような建物が伸びていた。

私が与えられた区域は、『王』に似た形をした建物（正確には横棒が一本多いが）の、南から二番目西側の翼だった。南側は庭園に面しており、また図書室も近い。

翼の付け根の部分には、私付きの女官に任じられたフェロル侯爵夫人の住まいがあつて。

私としては、少し緊張していた。

とにかく、しつらえられた部屋に入り、ドレスを脱いで普段着のドレスに着替える。

皇太子殿下に、初お目通りするのは明後日の朝。

どんな方なのだろうか???

ま、私はここで静かに暮らせばいいから、寵愛を賜ろうが賜るまいが、どうでもいいけどね。

第五話 後宮・・・（後書き）

馬車の上下振動が半端じゃないのは、実話です。

第七話 とりあえず・・・お目見えです（前書き）

ブランカ視点のお話です

第七話 とりあえず・・・お目見えです

後宮に入った二日後。

私達入内した令嬢達は、新皇帝陛下 もとい 現在の皇太子殿下に初のお目見えをすることになりました。

それと言うのも、皇帝陛下は毎朝一度、後宮内にある神殿に礼拝することが決まりになっていたのでしたからです。

その時は、いわゆる 『お目見え以下』 の、召使達と近習の女達を除く後宮に仕える女性たち全員が、神殿までの廊下の左右に並んで、お出迎えすることになっていたのでしたからです。

あ、『お目見え以下』 の 召使 や 近習 』 と、言いましたが、実は女性の使用人には4種類あるんですよ。
よく混同されるんですが・・・

先ず、女官にょかん

この方々は、基本的に貴族の令夫人か令嬢が就任し、

役目は女主人に行儀作法や舞踏会の時の面会相手を教える事や、話し相手、外出の際のお供、手紙や書物の朗読や代筆などです。

私の場合だと、フェロル侯爵夫人がこの役割です。

次に、侍女じしや

下級貴族の令嬢達や、平民でも上級クラスの女性達が就任することが多く

役目は女主人の化粧や結髪、衣装の着付け、来客の取次ぎ、食事や茶菓の給仕、それに女官を連れるほどでもない場所へ女主人が出向くときのお供などです。

私の場合では、アンナがこれに当たります。

三番目は、きんじゆ近習

侍女同様に、下級貴族の令嬢や、平民でも上級クラスの女性達が就任することがほとんどで

役目は侍女とほとんどがかぶっており、女主人が洗面や湯浴みをする時の介添えや、化粧や結髪の手伝い、衣装の用意、食事や茶菓の給仕、女主人が外出する時の乗り物などの手配などです。

入内した私には、宮廷からこの近習の女性が二人、つけられました。

最後が、いわゆる めしつかい召使

平民の中級クラス以下の出身者（と、言っても、身元確認はきちんとなされていますが）で

役目は掃除、洗濯、靴磨き、厨房から食事を運ぶこと（後宮では召使を含む全員の食事は、専門の厨房で調理されます）洗面や湯浴みの時の浴室や洗面所の支度など、雑用全般を行います。

入内した私付きの召使となったのは、四人です

さて、余計なことを話してしまいました・・・

皇帝陛下が行っていた毎朝の神殿への礼拝は、前皇帝陛下が崩御されたため、現在は皇太子殿下が行っておいのです。

もっとも、現在の皇太子殿下は、お父上であらせられた前皇帝陛下の喪に服しておいででございますから、神殿への礼拝は毎朝ではなく、月に3度ないし4度なのだそうです。

しかし、この 朝の礼拝 の時こそ、私達入内した貴族令嬢にとっては皇太子殿下のお目に留まるチャンスなのです。

お目に留まって、首尾よく夜のお相手を務めることが出来・・・万が一ご懐妊なんてことになりましたら、戴冠式の折に第一后妃とな

る可能性はぐっと高くなるのですから。

まあ、私にとっては、

皇太子殿下に初お目見えする儀式

くらいの事でしたが。

アンナや近習の女性、フェロル侯爵夫人はやたら張り切ってしまいまして。

私を飾り立てようとしています。

しかし、私は飾り立てられること自体は嫌いではありませんが、前皇帝陛下の喪中と言うことも考慮しまして。

ドレスは生地は超一級品ですが色は黒に近い物を選び、アクセサリもシンプルな物にしました。

カラーン・・・

カラーン・・・

神殿の鐘が鳴っています。

いよいよ皇太子殿下・・・アルフォンソ皇太子殿下が、神殿に続く廊下へおいでになられるのです。

表御殿と後宮を結ぶ、唯一の門の扉。

そこから少し後宮内に入った神殿に続く廊下の左右に、私をはじめとした入内した令嬢達や女官達、侍女達が並びました。

私は女官長のクエンカ侯爵夫人の指示に従い、表御殿側から見て右手の二番目に立ちます。

鐘の音が聞こえてから、待つことしばし
アルフォンソ殿下が、廊下へと姿を現されました。

「皇太子殿下、二日前に入内いたしました后妃候補の令嬢達が、
本日よりお出迎えに加わるようになりました。
どうか、お言葉をお願いいたします」

ドレスの裾を広げ、頭を下げている私達に、クエンカ侯爵夫人の声
が聞こえてきます。

「殿下、ご紹介いたします。

ウエルバ侯爵令嬢 アデーラ・デ・ウエルバ様でございます」

衣擦れの音とともに、私同様に入内した令嬢達が紹介されていきま
す。

「パラカルボ侯爵令嬢 カロリーナ・デ・パラカルボ様」

「ウエスカ伯爵令嬢 ブランカ・デ・ウエスカ様」

私は三番目に紹介されました。

下げていた頭を軽く上げ、皇太子殿下のお顔を拝見した後、また深
くお辞儀をします。

皇太子殿下は、微笑んだまま

「よろしく」

と、私にお声をおかけになられ、前を通り過ぎていかれました。

ま、こんなものですよね。

初お目見えなんて。

入内した令嬢達は、私以外にも七人いるのですから。

その後、

オリウエラ伯爵令嬢　クリステイネ・デ・オリウエラ様

アビレス伯爵令嬢　コンスタシア・デ・アビレス様

リナーレス子爵令嬢　ベアトリス・デ・リナーレス様

ハエン子爵令嬢　ローサ・デ・ハエン様

ヘタフェ男爵令嬢　ソフィア・デ・ヘタフェ様

と、続きましたが・・・

皇太子殿下のお言葉は、私と全く同じものだったのです。

第八話 それは、秋の神殿で その一（前書き）

ブランカ視点でのお話 その3 です

と、言うか、これからもブランカ視点でのお話になることが多いと思います

第八話　それは、秋の神殿で　その一

私が入内して、10日ばかりが経過した。

後宮での生活にも慣れはじめた。

ま、今、私達入内した令嬢達がやっている事と言えば、二日に一度、午前中に

『お后教育』

なる、礼儀作法や後宮の年中行事、しきたり などについての講義を受ける事と、皇太子殿下が神殿においでになられた時のお出迎え。その他には、

お茶会

と、称して他の令嬢達を招いての、ライバル同士の腹の探りあい・

だろうか。

私も、二度ばかり、お茶会に招かれました。

私、はっきり言ってこういう会は苦手なんですが・・・

フェロル侯爵夫人やアンナが

「后妃候補同士のお付き合いは、とても大切なものですから、是非、ご出席下さい!!」

なんて言うものですから、しぶしぶながら参加することになったのです。

お茶会での話しは、私にとっては退屈きわまりのないものでした。

最初に招かれたハエン子爵令嬢のローザ様ときたら、口を開けば、

「この茶器は、どこそこの工房で作られた品で、いくらくらいする」

とか

「こちらの絵画は、さる高名な画家にわざわざ注文して描かせた・
・・」

とか

はつきり言ってご実家の自慢話ばかりでしたし

次に招かれたパラカルボ侯爵令嬢のカロリーナ様は、ご実家の自慢話こそなさらないものの、

「どこそこの公爵家では、ご当主が隠し子をもうけていたのが、奥方にバレて・・・」
とか

「某仕立て屋では、縫い子にご子息が手を出して・・・」
とか言う、いわゆる 巷にあふれている 噂話 ばかりなさるので
すから。

まあ、ご実家の自慢話よりは、噂話の方が、まだたになることもありますから、話していて楽でしたけれどね。

それはともかく。

私、入内してから、どうしても行きたい場所があったのです。

それをフェロル侯爵夫人に話しますと、最初は目を丸くしまして。

「ブランカ様、そのような場所に何故・・・」

と、言ったのですが、

「中を見学したいのですが・・・ダメなのですか？
ならば、諦めますが」

と、涙目で私がいいますと、侯爵夫人は

「ダメと問うわけではございませんが・・・
とにかく、女官長にお願いしてみましよう
と、言ってくれたのです。」

そして今日。

私は、フェロル侯爵夫人の案内の元、行きたかったこの場所に立っています。

え？

ここがどこか、まだ申ししておりませんでしたね。

ここは、王宮内の西門近くにある神殿の一つ

西の神殿

なのです。

王宮の中には、後宮にある神殿とは別に、春夏秋冬の神々をお祀りした神殿がありまして。

東西南北の門の近くに、その神殿はあります。

春の女神をお祀りした 東の神殿 こと 春の神殿

夏の神をお祀りした 南の神殿 こと 夏の神殿

秋の女神をお祀りした 西の神殿 こと 秋の神殿

冬の神をお祀りした 北の神殿 こと 冬の神殿

の、四つです。

私が、それらの神殿に行きたかった理由は・・・

他愛もないことです。

これらの神殿は、数百年前に建てられた、歴史的に優れた建物であることと、

内部の装飾が、それはそれは美しいものだど、ある本で読んでいたからでして。

どうしても直に見たかったですね。

もっとも今回、見学が許されたのは、西の神殿だけでしたけれど私はうれくてなりませんでした。

だって、お正月の十日間と秋の収穫祭の期間を除けば、普段は神官と巫女、皇帝陛下以外の立ち入りが禁止されている西の神殿に、特別に入ることができるのですから。

さて。

私がフェロル侯爵夫人と西の神殿に向かいますと、神殿の門の所で聖衣をまとった護衛の巫女たちに囲まれました。

「ここから先は聖域。

皇帝陛下以外の方は、立ち入り禁止です」
と、言うのです。

でも、私はも皇太子殿下と神祇官の長官から、立ち入りを許すという許可証を、女官長を通していただいておりますから、それを示しますと、巫女たちは、

中に入るのが私一人のみならば・・・

と、言う条件で、中への立ち入りを許してくれました。

「本当にお一人で大丈夫でございますか？ ブランカ様」

「大丈夫よ、心配しないで。」

第二、私、一人旅には慣れていきますから」

「一人旅って・・・まさか・・・ブランカ様!!!!」

「あら、フェロル侯爵夫人は知らなかったの？」

私、入内する前には、お父様やお母様の許可を頂いた上で、ちよこちよこ一人旅していたのよ」

「はぁ・・・」

目を点にして驚くフェロル侯爵夫人をその場に残し、私は巫女の後について、神殿の内部へと入りました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5953y/>

コスモスのように・・・

2011年11月25日12時49分発行